

## 慰霊の日前にお薦めの本



広報委員 石川 清和

### 他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス

若泉 敬著 文藝春秋

政治家が軽くなってしまった最大の理由は戦後復興の中で経済発展を最優先し、伝統・精神的なものを過去の古臭いものとして置き去りにしてきた私たちの生き方にあるのではないかと私たちはもう一度日本・沖縄の歴史を振り返り、私たちの体に流れる祖先から伝わる心・伝統文化をしっかりと取り戻し、新しい日本を作らねばならない。

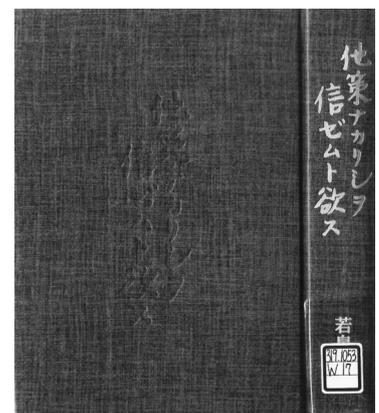
65回目の沖縄戦終戦の日がやってくる。しかし、24万人余の人々が命を失い、いまだに不発弾が生活を脅かし、米軍とともに持ち込まれた米国流の食文化が沖縄の健康長寿を崩壊させている。沖縄に住む我々にとってまだ戦争は終わっていないのである。

政治経済学者の若泉敬氏が、日本の総理大臣佐藤栄作首相から沖縄返還の調停役として白羽の矢を立てられたのは留学時代に培った人脈を見込まれたからである。外務省を飛び越し首相直々に極秘の任務を受け、家族にも大学にも知られないよう苦心しながら黒子に徹して交渉に臨むのである。ニクソン大統領、キッシンジャー国務長官らとの取引は所謂ネゴシエーションと呼ばれる交渉術を駆使してアメリカと日本の国益をかけた戦いであり、ほとんど不可能と思われた沖縄の本土復帰が実現したのは、佐藤総理の沖縄への篤い想いと若泉氏が完璧に黒子に徹した秘密交渉（沖縄返還交渉に当たった外務省の官僚もホットラインによる交渉を知らなかった）、ニクソン大統領の英断そして度重なる基地の被害に主権を取り戻すために行動を起こした沖縄住民の声があったからである。

ニクソン大統領は綿花を生産する南部の支持者からの化学繊維の輸入規制についての強い要求を佐藤総理に約束させる。ニクソン大統領にとって死活問題であったにも拘らず、佐藤総理はこの問題を重要視せず日米関係はこじれていき、ニクソン大統領の日本を飛び越えての中国訪問につながっていく。

若泉氏は沖縄返還において自らが果たした役割を誰にも知られずに自らの胸のうちに秘め闇に葬るか、出版するか苦悩するが、1990年代日本の政治の混迷を引き起こした、政治家の凋落、官僚の体たらくさを嘆き、警鐘の意をこめ出版を決意する。新渡戸稲造の「武士道」を示しながら「そこには、衣食足って礼節を知り、義、勇、仁、誠、忠、名誉、克己、といった普遍的な徳目が時空をこえて静かな輝きを放ち続けている。その不滅の光芒の中に、私は、戦陣に散り戦火に斃れた犠牲者たちが、彼らの祖国とその未来を担う同胞に希って止まない“再生独立の完成”と“自由自尊の顕現”を観るのである。」と記している。極東地域での有事に際し米国が沖縄に核を持ち込み配備できるという秘密メモの存在など衝撃的な事実を記したにもかかわらず反応が小さく、さらに英語版でも出版した。その英語版の冒頭は象徴的であり魂を揺さぶられる文章である。

慰霊の日を



前に忘れかけている鎮魂の想いを新たにしてくれる本である。

**沖縄 誰にも書かれなかった戦後史**

佐野眞一著 集英社インターナショナル

沖縄の戦後を当事者たちへインタビューすることによって詳細に生々しく、満州というもう一つの日本の戦後史に影響を与えた国と並べて俯瞰する事によって、今の沖縄、そして日本と沖縄の関係の本当の姿を浮かび上がらせていく。これは戦後、沖縄に生まれ約半世紀沖縄で生きてきた私にとっても、耳にしてきた事件の真相に迫り、真実が明らかになっていく時間であった。

この本は下記の5つの構成になっている。

1. 天皇・米軍・沖縄県警
2. 沖縄アンダーグラウンド—沖縄空手・芸能・花街・やくざ
3. 沖縄の怪人・猛女・パワーエリート 瀬長亀次郎・四天王
4. 踊る琉球歌う沖縄—芸能プロダクションの隆盛
5. 今日の沖縄・明日の沖縄

昭和天皇は1947年にGHQ 外交局長に対し沖縄の支配を認める「琉球諸島の将来に関する天皇見解」要望書を提出した。この「沖縄を米国に“人身御供”として差し出した」とも言われる文書は極秘扱いされていて1979年に公になって以来、昭和天皇は死ぬまで沖縄に強い負い目を感じていたという。現天皇は、昭和天皇が遣り残した戦争犠牲者の慰霊の旅を続け、6月23日を「お慎みの日」として外出を控え、皇居で黙祷をささげているという。

今帰仁村出身の立法院議員中村眺昭氏の謎の失踪事件は小学生の頃に聞き、気になっていたことであった。しかしこの事件の真相は、作者が執拗に真実に迫ったにもかかわらず、米軍現金輸送車強奪事件との関連説、CIA 関連説、本土資本が絡んだ暴力団説など、いろんな説が挙がるが、真相究明には至らず残念であった。

1953年12月奄美大島は沖縄に先駆けて本土

復帰した。それを期に奄美出身者への差別は激化し、公務員の給与格差等は軽いほうで沖縄財政会の重鎮たちでさえ職を追われたという。国費学生として1978年に九州大学に入学した頃は、うちなーん人を差別をしないと宣言する差別がある程度であったが、1950年代とはいえ、これほど強い差別を我々沖縄人がしていたとは驚きであった。

沖縄経済について摸合が資金調達役割をしていた。摸合は信用が第一で不義理をすれば村八部にされた。一方米国がとった自由貿易主義によって税金がかからず物品が安く輸入されたため地場産業は育たず、輸入超過により資金は不足していた。そこで暗躍した闇金は疑うことを知らない沖縄人に資金調達を持ちかけてはだまし、倒産し乗っ取り奪い取っていく。そこには沖縄を蹂躪した経済の暴風が描かれている。本土復帰まもなく借金が嵩み本土へ夜逃げしていった近くの商店主の顔が浮かぶ。

最近沖縄出身の芸能人が多数いる。その理由についても、芸能界の裏の世界をインタビューしながら明らかにしている。面白かったのは戦後沖縄のエンターテイナーとして嘉手刈林昌、南沙織、安室奈美恵、よりも瀬長亀次郎が最高だったと記していることである。

沖縄の戦後を忘れつつある世代にも、まさにその時代に生き俯瞰することのなかった世代にも、そして復帰後に生まれ戦後を知らない世代にも読んで欲しい本である。

